

古代日本語の主節の無助詞名詞句—活格性との関わりから—

竹内史郎 (成城大学文芸学部)

siberius@seiyo.ac.jp

Bare Noun Phrases of Main Clauses in Old Japanese

Shiro Takeuchi (Seijo University)

1 はじめに

通時コーパスの作成においては、無助詞名詞句の扱いやその統語変化が重要な問題となる(近藤(2011))。特に名詞句のマークアップにおける統語的な情報の付与については、現代語と異なる部分が多いことが想定され¹、この方面での記述的な研究の進展が望まれるが、古典語における無助詞名詞句やその歴史に関し、答えることのできない基本的な疑問が少なくない。例えば主節の主語や目的語の振る舞いには、歴史上で異なった段階がいくつあり、それぞれの段階の特性や、それぞれの段階をつなぐ変化はどのように記述できるのだろうか。

本稿では、平安時代(10世紀)和文に見える主節を調査の範囲とし、主語や目的語として現れた無助詞名詞句の振る舞いについて考察を加える。この結論として、古代日本語の主節では、〈動作主〉主語と〈対象〉主語の振る舞いが異なり、〈対象〉主語はむしろ他動詞文の目的語と同様に振る舞うこと、古代日本語の無助詞名詞句は意味役割によってその振る舞いが決定されていること等を述べる。さらには、無助詞目的語とヲ格目的語の統語上の振る舞いの違いについても明らかにする。本稿の考察の結果が、上に述べた疑問の解決のための足がかりになればと考える。

2 調査の方針、前提など

今回の調査にあたり、注意すべき諸点を次に示しておく。

- 土左日記(静谿書屋本)、大和物語(大系本、底本は為家本)を調査
- 主節に現れた他動詞文、行為性の自動詞文、非行為性の自動詞文を採取
- ただし主語標示にガ/ノが現れ得る、連体形終止文や係り結び文は主節に含めない
- ハ・モ・ゾ・ナム・ヤ・カ・コソ等が主語ないし目的語に下接した例は、考察の対象としない

また、採取された他動詞文、行為性の自動詞文、非行為性の自動詞文の用例数は、次の通りである。

表1 採取された主節の他動詞文・自動詞文

他動詞文	行為性の自動詞文	非行為性の自動詞文
89	29	87

¹同じく近藤(2011)の指摘による。

本稿で扱う主節の無助詞名詞句とは、次のように、述語の項が無助詞として現れたものである。ここでは他動詞文の主語と目的語がたまたま共起しており、こうした例はごく少数である。

(1) a. いま、けふあるひと、ところににたるうたよめり。(土左日記・36-6)

b. 講師、もの、さけおこせたり。(土左日記・6-8)

c. 同じ帝、狩いとかしこく好みたまひけり。(大和物語・322-8)

ただし、無助詞名詞句が主節の述語の項であるかどうかを認める際には、注意が必要である。例えば、(2)(3)(4)に示す例では、ゴチックの無助詞名詞句が従属節述語の項か主節述語の項か明らかでない。

(2) a. あるひと、あがたのよとせいつとせはてて、れいのことどもみなしをへて、げゆなどとりて、すむたちよりいでて、ふねにのるべきところへわたる。(土左日記・1-3)

b. をとこをんな、からくかみほとけをいのりて、このみとをわたりぬ。(土左日記・26-10)

c. 越前権守兼盛、兵衛の君といふ人にすみけるを、としごろはなれて又いきけり。(大和物語・256-3)

(3) a. 十一日。あめいさゝかにふりて、やみぬ。(土左日記・37-10)

b. かゝるあひだに、ふなぎみの病者、もとよりこち／＼しきひとにて、かうやうのこと、さらにしらざりけり。(土左日記・34-5)

c. 「われ、かたきにせめられてわびにて侍り。御はかし暫時かし給はらむ、ねたき物のむくひし侍らむ」(大和物語・315-11)

d. このあるじの、またあるじのよきをみるに、うたておもほゆ。いろ／＼にかへりごとす。いへのひとのいでいり、にくげならず、みやゝかなり。(土左日記・39-2)

(4) a. 十八日。なほおなじところにあり。うみあらければ、ふねいさず。このとまり、とほくみれども、ちかくみれども、いとおもしろし。(土左日記・17-10)

b. かくてふねひきのぼるに、なぎさの院といふところをみつゝゆく。その院、むかしをおもひやりてみれば、おもしろかりけるところなり。(土左日記・36-2)

このような例は、今回の考察の対象としない。

また、もちろん次の例のように、ゴチックの無助詞名詞句が従属節の述語の項である場合は考察の対象としない。

(5) つきのあかきにぞわたる。ひと／＼のいはく、「このかは、あすかがはにあらねば、ふちせさらにかはらざりけり。」といひて、… (土左日記・39-9)

3 無助詞名詞句の振る舞いと解釈

平安時代和文の主節では、主語、目的語が無助詞名詞句として現れるため、他動詞の主語、目的語、自動詞の主語が等しく扱われる中立型として分析することができるかもしれない。しかし古代日本語はSOVないしSV言語と考えられ、ある条件の下で他動詞の主語は必ず目的語に先行するから(後述)、語順を考慮すれば両者の扱いが等しいとするわけにはいかない。

しかしながら、語順をたよりにしてそれぞれの名詞句の振る舞いの特徴づけを行うことにも問題がある。例えば英語のようなSVO/SVの語順をもつ言語であれば、どちらのSもVの左側にありOだけが右側ということで、単純に他動詞の主語と自動詞の主語の振る舞いが等しいと見て、主語の振る舞いを主格、目的語を対格と特徴づけられる。これに対し、SOVないしSVの語順をもつ言語においては、どちらのSもVの左側にあって一見振る舞いが等しく見えるが²、OもVの左側にあるので、自動詞Sの振る舞いが他動詞Sの振る舞いと等しいのか、あるいはOの振る舞いと等しいのか明らかでない。すなわち、SOV/SV言語では、語順のあり方からただちに分裂自動詞性³を否定できず、分裂自動詞性の検討のためにさらなる考察を加えなければならない。このようなわけで、日本語を含むSOV/SV言語においては、節中の他の要素に対する振る舞いをたよりにしてそれぞれの名詞句の振る舞いの特徴づけを行うことが望ましい。

以下では、上に述べた観点からそれぞれの名詞句の振る舞いの特徴づけを行う。分裂自動詞性を検証するため、自動詞を行為性の自動詞と非行為性の自動詞の二種に分けて考察を行う。なお、他動詞文の主語と行為性の自動詞文の主語を一括する場合〈動作主〉主語と呼ぶことにする。また、以下で非行為性自動詞文の主語を〈対象〉主語と呼ぶことがある。

3.1 〈動作主〉主語の振る舞い

まずは、他動詞文の主語と行為性の自動詞文の主語の振る舞いから観察する。他動詞文の主語は、(6ab)に示すように述語と隣接することもあれば、(6cd)のように様態副詞や目的語等の要素が介在することもある。

(6) a. これをきゝてよろこびて、ひと／＼をがみたてまつる。(土左日記・38-2)

b. 人人よばひ、殿上人などもよばひけれど、あはざりけり。そのあはぬ心は、帝をかぎりなくめでたき物になむ思たてまつりける。帝召してけり。(大和物語・322-4)

c. あるひとのこのわらはなる、ひそかにいふ。(土左日記・9-1)

d. いま、けふあるひと、ところににたるうたよめり。(土左日記・34-5)

行為性の自動詞文の主語でも同様であり、(7ab)は述語と隣接しており、(7cd)は様態副詞、二格名詞句が介在している。

(7) a. かくはいふものか。うつくしければにやあらん、いとおもはずなり。「わらはごとにてはなにかはせん。おんなおきな、ておしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらばやらん。」とて、おかれぬめり。(土左日記・9-8)

²実際に Baker(2001) では、日本語風の語順をもつ言語の主語は英語風の語順をもつ言語と通じるところがあるとされている。

³自動詞の主語が何らかの手段で一律に他動詞の主語ないし目的語と等しく扱われるのではなく、自動詞の主語のある部分が他動詞の主語と等しく、もう一方の部分が目的語と等しく扱われることを言う。

- b. とよみたりければ、かの室にとまりたりけるしどもあはれがりけり。(大和物語・243-10)
- c. 廿七日。かぜふき、なみあらければ、ふねいださず。これかれ、かしこくなげく。(土左日記・24-8)
- d. 泉の大將、故左のおほいどのにまうでたまへりけり。(大和物語・296-1)

より注目したいのは(8)(9)に示す例である。(8)では、他動詞文の主語と述語との間に主節の時を表わす成分が介在している。

- (8) a. また、としこ、雨のふりける夜千兼を待ちけり。(大和物語・262-8)
- b. 故兵部卿の宮、この女のかゝることまだしかりける時、よばひたまひけり。(大和物語・286-4)

(9)では、行為性の自動詞文の主語と述語との間に、やはり主節の時を表わす成分が介在している。

- (9) 堤の中納言の君、十三のみこの母宮すむ所を内裏にたてまつりたまひけるはじめに、「帝はいかゞおぼしめすらむ」など、いとかしこくおもひなげき給けり。(大和物語・252-7)

さらには(10)(11)に示すような例もある。(10a-c)では他動詞の主語と述語との間にテ節やテ節が介在している。

- (10) a. また、あるひと、にしぐになれど、かひうたなどいふ。(土左日記・5-5)
- b. ふちはらのときぎね、ふなぢなれど、むまのはなむけす。(土左日記・1-7)
- c. おなじ人、かの父兵衛の佐うせにける年の秋、家にこれかれあつまりて、宵より酒のみなどす。(大和物語・244-10)

行為性の自動詞文の主語の場合でも、述語との間にテ節が介在している例を見出すことができる。

- (11) a. こよひ、ふなぎみれいのやまひおこりて、いたくなやむ。(土左日記・35-6)
- b. そのうた、よめるもじ、みそもじあまりなゝもじ。ひとみな、えあらでわらふやうなり。うたぬし、いとけしきあしくてゑ(ん)ず。(土左日記・18-10)
- c. 平中、閑院の御にたえてのち、ほど経てあひたりけり。(大和物語・252-12)

以上のように、他動詞文の主語と行為性の自動詞文の主語が共通した振り舞いを示すのは、ともに〈動作主〉であることに起因していると考えられよう。〈動作主〉主語と述語との間には介在する要素がなくてもよいし、二格名詞句や様態副詞等のより中核的な要素が介在することができるし、ある種の付加的な成分や節が介在することもできる。以上から、〈動作主〉主語は無助詞名詞句の形で述語から大きく離れることができると見るべきである。

3.2 〈対象〉主語と目的語の振る舞い

次に、非行為性の自動詞文の主語と他動詞文の目的語の振る舞いを観察する。非行為性の自動詞文の主語は、(12)に示すように、そのほとんどが述語と隣接している。

- (12) a. 日しきりにとかくしつゝ、のゝしるうちによふけぬ。(土左日記・1-6)
- b. 廿二日。よんべのとまりより、こととまりをおひてゆく。はるかにやまみゆ。(土左日記・22-5)
- c. おなじ女、内裏の曹司にすみける時、忍びてかよひ給人ありけり。(大和物語・270-1)

同じく他動詞文の目的語でも述語と隣接した例が目立つ。

- (13) a. なほかみのたちにてあるじしのゝしりて、郎等までにものかづけたり。(土左日記・2-8)
- b. 五條にぞ少将の家あるに行きつきてみれば、いといみじうさわぎのゝしりて門さしつ。(大和物語・280-11)
- c. これをみて、よくみまほしさに、「この蘆もちたるをのこ呼ばせよ、かのあし買はむ」といはせける、…(大和物語・318-13)

一方、述語と隣接しない場合では、非行為性の自動詞文の主語と述語との間には、二格名詞句、程度副詞、様態副詞等が介在する。

- (14) a. むかし、とさといひけるところにすみけるをんな、このふねにまじれりけり。(土左日記・26-4)
- b. この女かほ容貌いときよらなり。(大和物語・320-5)
- c. かくいふあひだに、よやうやくあけゆくに、かちとりら、「くろきくもにはかにいできぬ。かぜふきぬべし。みふねかへしてん。」といひて、ふねかへる。(土左日記・17-7)
- d. かくうたふをきゝつゝこぎくるに、くろとりといふとり、いはのうへにあつまりをり。そのいはのもとに、なみしろくうちよす。(土左日記・21-7)

また、同じく他動詞文の目的語でも、述語との間には、二格名詞句、頻度を表わす副詞、様態副詞、否定に呼応する副詞等が介在する。

- (15) a. 「かれが申さむこと院に奏せよ。…」(大和物語・311-10)
- b. かちとりまたたひもてきたり。よね、さけ、しば／＼くる。かちとり、けしきあしからず。(土左日記・15-8)
- c. かくいひつゝくるほどに、「ふねとくこげ、ひのよきに。」ともよほせば、(土左日記・30-7)
- d. かゝるあひだに、ふなぎみの病者、もとよりこち／＼しきひとにて、かうやうのこと、さらにしらざりけり。(土左日記・34-5)

このように、非行為性の自動詞文と他動詞文の目的語から共通した振る舞いが読み取れるのは、それらの意味役割がともに〈対象〉であるからであろう。〈対象〉主語と他動詞文の目的語は、その大半が述語に隣接して現れ、隣接しない場合は、程度副詞、様態副詞、二格名詞句、頻度を表す副詞、否定に呼応する副詞等が介在するに過ぎない。〈動作主〉主語の場合とは異なり、介在する要素がより中核的な要素に限られ、ある種の付加的な成分や節が介在することはない。無助詞名詞句の形で実現した〈対象〉主語や他動詞文の目的語は、〈動作主〉主語に比して述語からの距離が制限されていたと考えられる。

最後に、上の観察にとって問題となりそうな例について言及しておく。

(16) からうた、こゑあげて いひけり。(土左日記・2-8)

この例では、目的語と述語の間にテ節が介在し、問題例と見えそうであるが、このテ節は付帯状況を表わしており、先に(10c)や(11a-c)で示した、〈動作主〉主語と述語の間に介在するテ節とは異なる。次に(10c)(11a)を再掲する。

(17) a. (= 10c)

おなじ人、かの父兵衛の佐うせにける年の秋、家にこれかれあつまりて、宵より酒のみなどす。(大和物語・244-10)

b. (= 11a)

こよひ、ふなぎみれいのやまひおこりて、いたくなやむ。(土左日記・35-6)

(17a)は継起、(17b)は原因・理由を表わすテ節であり、目的語と述語との間には、継起や原因・理由を表わすテ節は介在しなかったと考えられる。

また、次に示す例では、目的語と述語の間に副助詞つきの主語が介在している。

(18) からうた、こゑあげていひけり。やまとうた、あるじも、まらうども、ことひともいひあへりけり。(土左日記・2-9)

無助詞主題と捉える可能性もあるかもしれないが、処置に悩む例である。

3.3 解釈

Perlmutter(1978)では、自動詞のその唯一の項が、他動詞の目的語が動詞に対してもつような関係⁴をもち得ることが明らかにされた。すなわち非対格仮説の下では、初期層において、自動詞にはその唯一の項が主語である非能格動詞(unergative verb)と、その唯一の項が目的語である非対格動詞(unaccusative verb)の二種があるとされた。これをふまえ、Levin and Rappaport Hovav (1995)では、このような自動詞の唯一の項がそのまま目的語として表層に現れる場合を表層非対格(surface unaccusative)、主語として現れる場合を深層非対格(deep unaccusative)と呼んでいる。非対格仮説は、複層の理論である関係文法に依拠するものであり、関係文法では初期層と表層の間では文法関係の変更が行われるとされるので、深層非対格の場合は目的語から主語への非対格昇格(unaccusative advancement)があることになる。したがって、世界の言語には非対格昇格のある表層非対格言語と、非対格昇格のない深層非対格言語が存することになる。この観点からすると、現代の日本語や英語は深層非対格言語ということになる。

⁴Perlmutter(1978)では、他動詞の目的語が動詞に対してもつような関係を 2arc、他動詞の主語が動詞に対してもつような関係を 1arc と称している。

以上のことは、より意味的な側面を重視して捉えなおすことができる。一般に動詞の項は外項 (external argument) と内項 (internal argument) からなり、他動詞は外項と内項をもち、非対格動詞は内項のみをもち外項をもたず、非能格動詞は外項のみをもち内項をもたないとする考え方がある。おおよそ外項には〈動作主〉が、内項には〈対象〉が対応するものと考えられる。これを前提とすると、外項、内項が句構造、語順、格標示の上でどのように実現するかが問題となるが、ここでは、項構造上の外項、内項の区別が何らかの形で保持されて実現する言語と、外項、内項の区別が形式上保持されず実現する言語があることに注意しておきたい。前者は活格性を有する言語、後者は対格性あるいは能格性を有する言語ということになる。

さて、以上をふまえると、先に見た平安時代の主節における無助詞名詞句の振る舞いはどのように解釈できるだろうか。よく知られているように、日本語は、述語が末尾に位置し、かつ、述語は、その述語動詞によって記述される出来事の主要な関与者 (主語、目的語、間接目的語) を個々に表わす表現を必ずしも含まなくてもよい言語である。よって、文法関係や意味役割のあり方に関係なく名詞句が容易に述語と隣接することになるし、また、自動詞の唯一の項が述語と隣接する割合が高くなるのは当然である。だとすれば、今回のデータの解釈において重視されるべきは、述語との隣接というよりは、述語との間にどのような要素を介在させることができるかであるように思える。

先の調査から、無助詞の〈動作主〉主語は大きく述語から離れられるのに対し、無助詞の〈対象〉主語と無助詞の他動詞文の目的語は〈動作主〉主語ほど述語から離れられないことが明らかになった。そうであるならば、古代日本語の主節では、項構造上の外項、内項の区別が、節中の他の要素に対する振る舞いにおいて保持されており、活格性を有しているとの特徴づけが成り立つ。すなわち、古代日本語の主節の無助詞名詞句は意味役割によってその振る舞いが決定されていると考えられる。

4 無助詞目的語とヲ格目的語

これまでに見たように、古代日本語の主節の名詞句は無助詞名詞句として現れるが、実のところ、主節の他動詞文の目的語がヲ格名詞句として実現した例も存する。

- (19) a. かこのさきといふところに、かみのはらから、またことひと、これかれさけなにと
ともておひきて、いそにおりゐて、わかれがたきことをいふ。(土左日記・4-4)
- b. 「そも／＼まことか」など問はせ給に、鳥飼といふ題を皆人々によませ給けり。
(大和物語・310-13)

(19a) は述語に隣接した例であり、(19b) は他の要素を介在させた例であるが、これらの振る舞いは先に見た無助詞目的語と変わらない。

ところが、興味深いことに、次のような振る舞いのヲ格目的語を見出すことができる。

- (20) a. をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみんとてするなり。(土左日記・1-1)
- b. 三月ばかり、こゝにわたりたるほどにしも、苦しがりそめて、いとわりなう苦し
とおもひまどふを、いとみじとみる。(蜻蛉日記・148-16)

- c. 忠文がみちのくにの將軍になりてくだりける時、それが息子なりける人を、監の命婦しのびてあひかたらひけり。(大和物語・263-6)
- d. 扇どものをかしきを、その頃は人々持たり。(紫式部日記・10-4)
- e. そのものどもを九月つごもりにみないそぎはててけり。(大和物語・232-13)

主節におけるヲ格目的語と無助詞目的語を比較してみると、両者はともに目的語であっても、節中の他の構成要素に対する振る舞いが明らかに異なる。例えば、(20ab)はヲ格目的語と述語との間にトテ節ないしト節が介在した例、(20cd)はヲ格目的語と述語との間に〈動作主〉主語ないし主題句が介在している例、さらに(20e)は、主節時を表わす成分が介在している例であるが、管見では、節中の他の要素とこのような関係にある無助詞目的語を見出すことができなかった。

この観察が正しいとすると、ヲ格目的語は、格助詞ヲを伴うことで無助詞目的語以上の振る舞いを与えられていることになる。言い換えれば、ヲ格目的語は、格助詞ヲによって無助詞かつ〈対象〉としての名詞句の振る舞いから自由になっているということである。この意味で、格助詞ヲは、文法関係を標示するための単なる標識ではなく、目的語に独自の統語的な機能を与えていると見ることができる⁵。こうした無助詞目的語とヲ格目的語の振る舞いの違いは、古代日本語の無助詞名詞句の振る舞いが意味役割により決定されていることの根拠となる。

5 古代日本語の格標識——ヲ・イ・シ——

古代語の格標識(有形格助詞)の特性に言及しておく⁶。古代日本語では、いわば二足ないし三足のわらじの一方として格標識が存在している点に特徴があるが、この点について近藤(2000)にすぐれた考え方が示されている。それまでの議論では、上代語の助詞ヲについて品詞的な性格づけができず、そこから格助詞ヲを取り出すのは困難であるとされ、文体・談話論的な側面からその機能が考察されていた。近藤(2000)では、助詞ヲを構造上の観点から分析することで品詞分類の根拠が示され、間投助詞、格助詞、終助詞が明確に分類された。(21a)は格助詞、(21b)は間投助詞の例である。なお終助詞の例は省略する。

(21) a. にきびにし家ゆも出でてみどり子の泣くをも(哭乎毛)置きて…(萬葉集・481)

b. ほととぎすここに近くを(知可久乎)来鳴きてよ過ぎなむ後に験あらめやも(萬葉集・4438)

また、格助詞が生起する環境にある助詞ヲの標示のあり方に着目すると、〈対象〉主語ないし目的語に限られ、〈動作主〉主語を標示することがない(竹内2008a)。こうした分布は、格助詞以外の振る舞いであるとすれば説明がつかないから、このことは助詞ヲに格助詞が認められる根拠となろう。

その後、竹内(2008a)、竹内(2008b)においても、助詞イや助詞シに助詞ヲと同様の分類が適用され、それまで均質に間投助詞ないし係助詞とされていた助詞イや助詞シから、格

⁵ヲバによる目的語も含め、無助詞目的語、ヲ格目的語等の関係を表せば次のようになる。
無助詞 ≤ ヲ ≤ ヲバ

金水(2001)、Yanagida(2005)等で示された法則も考慮しつつ、今後この点を考究していきたい。

⁶助詞ガ/ノについては、別に扱うこととする。詳しくは野村(1993)を参照。

助詞を取り出せることが示された。格助詞イを (22a) に、間投助詞イの例を (22b) に、格助詞シの例を (23a) に、間投助詞シの例を (23b) にそれぞれ示しておく。

- (22) a. 我が背子が跡踏み求め追ひ行かば紀伊の関守い (關守伊) 留めてむかも (萬葉集・545)
- b. 向つ峰の若楓の木下枝取り花待つい間に (花待伊間尔) 嘆きつるかも (萬葉集・1359)
- (23) a. 大御舟泊ててきもらふ高島の三尾の勝野の渚し (奈伎左思) 思ほゆ (所レ念) (萬葉集・1171)
- b. 可之布江に鶴鳴き渡る志賀の浦に沖つ白波立ちし来らしも (多知之久良思毛) (萬葉集・3654)

助詞ヲの場合と同じく、格助詞が生起する環境にある助詞イ、助詞シの標示のあり方に着目すれば、助詞イの標示は〈動作主〉主語に限られ、助詞シの標示は〈対象〉主語ないし目的語に著しい偏りが認められる。これらの分布が格助詞以外の振る舞いであるとする説明が難しく、助詞イや助詞シにおいても格助詞を設定する必要がある。格助詞ヲ、イ、シは外項と内項の別に対応した形で分布しており、格助詞イは動作主標識、格助詞ヲ、シは非動作主標識とすることができる (Vovin1997、竹内 2008a、竹内 2008b)。

以上のように、助詞ヲ、イ、シではいずれも間投助詞と格助詞が認められるが、このことは偶然ではないように思われる。すなわち、いずれの助詞にも、機能的な成分 (間投助詞) から統語的な成分 (格助詞) へと推移していく文法化が生じた (あるいは生じつつあった) と見るべきである。ヲ、イ、シの文法化は、まず、外項ないし内項と述語の結合を経過して、のちに主語標示ないし目的語標示へと進んでいくと想定され、このような文法化の過程に位置づけてこそ、先述した格助詞ヲ、イ、シの標示の分布はよく理解できる。結果として、ヲの文法化のみが収束し、イとシはその過程で途絶えてしまったと考えられる。

したがって、格助詞ヲ、イ、シには間投助詞に通じる性格が残されていよう。項と述語の結合を明示する統語的な成分であると同時に多分に機能的な成分としての性格もあるであろう。例えば、古代語の主節では、格助詞ヲ、イ、シの使用が任意であり、むしろ無助詞名詞句としてあるのがふつうである。

以上のことをふまえれば、主節において、格標識は発達しているとは言えず、古代語の主節の無助詞名詞句から成る体系は、活格性を含み、かつ、格標識が未発達である体系とすることができる。すなわち、語順、格等的手段によってバイアス (対格化ないし能格化) が加えられていないニュートラルな体系とすることができる。

6 おわりに

以上、本稿では、無助詞目的語とヲ格目的語の比較や格標識ヲ、イ、シにも言及しながら、古代日本語の主節の無助詞名詞句の振る舞いやその体系について論じてきた。

古代語の主節の無助詞名詞句から成る体系にある種の活格性が認められるとすれば、その後の対格性を有する体系への移行が問題となる。また、上代語の主節の無助詞名詞句についても今回の結果との比較考察が必要であろうし、さらには、今回扱うことができなかった無助詞準体の振る舞いや無助詞主題の認定についての考察も今後の課題となるように思われる。

謝辞

本研究は、文部科学省科学研究費補助金若手研究 (B) 「日本語の活格性にまつわる記述的研究」(平成 20～23 年度、研究代表者：竹内史郎) による研究助成を受けています。

用例出典

○萬葉集…『萬葉集 本文篇』『萬葉集 訳文篇』(ともに塙書房)、○土左日記…『土左日記 総索引』(日本大学人文科学研究所)、○大和物語・蜻蛉日記…岩波日本古典文学大系、○紫式部日記…『紫式部日記』(岩波文庫)

参考文献

- 金水敏 (1993) 「古典語の「ヲ」について」仁田義雄 (編) 『日本語の格をめぐって』 pp. 191-224, くろしお出版
- 金水敏 (2001) 「助詞から見た日本語文法の歴史」(文法学会研究会 第三回集中講義資料 第一分冊)
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 近藤泰弘 (2011) 「通時コーパスの利用法と設計」NINJAL 共同研究「通時コーパスの設計」研究発表会 (9 月 16 日、国立国語研究所)
- 竹内史郎 (2008a) 「古代日本語の格助詞ヲの標示域とその変化」『國語と國文學』85 卷 4 号, pp. 50-63.
- 竹内史郎 (2008b) 「助詞シの格助詞性——非動作格性と品詞分類——」『語学と文学』44 号, pp. 9-23、群馬大学語文学会
- 野村剛史 (1993) 「上代語のノ・ガについて (上)」『國語國文』62 卷 2 号, pp. 1-17.
- Baker, Mark C. (2001) *The Atoms of Language*, Basic Books. (郡司隆男 [訳] (2003) 『言語のレシピ 多様性にひそむ普遍性をもとめて』岩波書店)
- Levin, B. and Rappaport Hovav, M. (1994) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*, MIT Press.
- Perlmutter, D. M. (1978) Impersonal passives and the unaccusative hypothesis, *Proceedings of the Fourth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, pp. 157-189, Berkeley Linguistic Society.
- Vovin, Alexander (1997) On the syntactic typology of old Japanese, *Journal of East Asian Linguistics* 6, pp. 273-290, Kluwer Academic Press.
- Yanagida, Yuko (2005) *The Syntax of Focus and WH-questions in Japanese: A Cross-linguistics Perspective*, Hitsuzi shobo Publishing.